

活動報告

ワークショップ／シンポジウム／多文化研究セミナー報告

長澤唯史

2014年度より始まった大学活性化経費による学生支援及び地域文化振興のイベントとして、「プロのクリエイターと学生による創作・翻訳・評論等のワークショップ」を本年度も開催した。本学学生との交流を図り学生の表現活動への意欲を高めると同時に、地域の文化発信の場として椙山女学園大学を位置づける、という試みでもある。5年目になる本年も東海地方の内外から表現活動に携わる方々をお招きし、学生向けの各種ワークショップやトークイベントを行った。

本年度の事業は、(1) 書評ワークショップ、(2) 澤田瞳子氏トークショー&サイン会、(3) 厚見玲衣×宮崎尚 (SHO) クロストーク、以上3つの企画である。

(1) 書評ワークショップ

ワークショップ事業の中心企画である「書評ワークショップ」も今年度で第5回となる。講師は例年通り大矢博子氏にお願いした。書評や文庫解説だけでなく、文春のサイトや雑誌『ダ・ヴィンチ』のコラムなどでも連載が始まりこれまで以上にご多忙な中、それでも昨年と同じく全4回の講座をお引き受けいただくことができた。

今回の申し込み者は昨年同様6名であった。昨年から引き続き参加している文化情報学部の学生に加え、現代マネジメント学部の3年生もメンバーに加わってくれた。また参加者の意欲や表現力なども全体として高いレベルを維持していた。

ワークショップの内容及び進め方については例年通りで、全員で同じ課題図書についての書評を書き、合評をする形式で行われた。第1回、第2回の課題本は2冊のうちどちらかを選ぶという方式、第3回の課題はテーマ批評として自分で3冊の本を選ぶ、という昨年同様の内容であった。

第1回(5/7・月)は大矢先生による講義形式で、書評とは何か、書評を書くコツは、プロとアマの違いはどこにあるかなどの基本について分かりやすく説明をしていただいた。書評と感想文や評論はどう違うかについても、初心者にもわかりやすく例を挙げて説明していただけるので、初めて参加する学生もポイントを的確につかめたと感想を述べていた。

第2回以降は書評の合評会である。6/4の第2回は①寺地はるな「ミナトホテルの裏庭には」(ポプラ文庫) ②ピーター・スワンソン「そしてミランダを殺す」(創元推理文庫)、7/2

の第3回は①カート・ヴォネガット・ジュニア「タイタンの妖女」(ハヤカワ文庫SF)②澤田瞳子「火定」(PHP研究所)がそれぞれ課題図書であった。また今回より③自由課題も加えられ、より自由度が広がった(だが、結果的には参加者は全員課題図書から書評対象本を選んでいた)。

10/1の第4回はテーマ書評で、「〇〇にお勧めの三冊」というテーマに合わせて三冊を取り上げて紹介するという自由課題であった。いずれの回も各自の好みや個性が発揮された多様な作品と内容の書評が集まった。

最後に、来年度からは大学活性化経費による申請が認められないこととなり、本ワークショップも本年度で終了となる可能性が高い。残念なことである。

(2) 澤田瞳子氏トークショー&サイン会

7月15日(日)、国際コミュニケーション学部主催の国際文化フォーラム「澤田瞳子氏トークショー&サイン会」を開催した。今回は本学学生を含む80名ほどが参加したが、関西方面から遠路はるばるお出でになった方、年配の時代小説ファン、お母さんと参加した中学生など、たいへん幅広い参加者が集まってくれた。

ゲストの澤田氏京都市生まれ、同志社大学大学院文学研究科博士課程前期修了。2008年、第2回小説宝石新人賞最終候補となり、2010年に『孤鷹の天』でデビュー。翌年、本作は第17回中山義秀文学賞を受賞。2012年の『満つる月の如し 仏師・定朝』で第2回本屋が選ぶ時代小説大賞、第32回新田次郎文学賞受賞。『若冲』(2015)は、浮世絵師伊藤若冲の人生を大胆な仮説に基づいて描き、大きな話題となった。本作で第153回直木賞候補、2016年に第9回親鸞賞受賞ののち、『火定』(2017)で再び第158回直木賞候補、第39回吉川英治文学新人賞候補となる。現在もっとも注目されている時代小説家の一人である。

司会は例年と同じく、書評家の大矢博子氏にお願いし、大矢氏が澤田氏にインタビューをする形でトークショーが進められた。

トークは澤田氏が時代小説、それも奈良時代をなぜ舞台に選んだのかというキャリアの出発点から始まり、歴史上の出来事や実在の人物を描くうえでの苦労や面白さ、また事実とフィクションをどのようにバランスを取りながら織り交せていくかなど、具体的な例を挙げて分かりやすく紹介してくださり、会場の参加者も熱心に聞き入っていた。また澤田氏、大矢氏それぞれからお勧めの歴史・時代小説やマンガなどを紹介して下さったのも、たいへん参考になった。

また最後の15分ほどは、観客として参加されていた名古屋在住の時代小説家、天野純希氏にも壇上に上がっていただき、現在の時代小説の状況についての情報提供や意見交換もあるなど、盛りだくさんの内容となった。

質疑応答の終了後は、サイン会を実施した。会場脇に設えられた物販スペースで澤田氏の

小説を手に入れた参加者らは、長蛇の列を作ってサインを求めている。

(3) 厚見玲衣×宮崎尚 (SHO) クロストーク

国際コミュニケーション学部が主催する国際文化フォーラムとして「厚見玲衣×宮崎尚 (Sho) クロストーク」が、12月10日(月)に開催され、学内外から約60名が参加した。

日本を代表するキーボーディストの厚見玲衣氏をお迎えし、長澤の司会のもと、本学非常勤講師で、レッド・ツェッペリンのトリビュートバンド Cinnamon の元ヴォーカル宮崎尚 (Sho) 氏とともに音楽談義を展開。普段は聞けない裏話を交えながら、厚見氏のアメリカやヨーロッパでの音楽活動の経験をお話いただいた。

厚見氏は、「メディアの変化によって、エンドユーザーへの曲の届け方がどのように変わったか」という参加者からの質問に対し、CDが売れないことにより音楽業界が縮小した現状を指摘。「ライブ活動に注力するようになり、ライブ代などは高くなっているが、本来の芸術の在り方に戻ったのではないか」と肯定的な見方を示すなど、実作者の立場からの貴重な意見が聞けたのが学生にも刺激になっていたようである。

最後には、厚見氏のピアノ演奏とともに、宮崎氏と国際言語コミュニケーション学科の小澤先生がパフォーマンスを披露。宮崎氏は Led Zeppelin の「Stairway to Heaven」や Ben. E. King の「Stand By Me」を、小澤教授は VOW WOW の「Shock Waves」を熱唱し、会場は大いに盛り上がった。